

成田山書道美術館蔵松井如流宛熊谷恒子書簡

前川知里

はじめに

本稿では、成田山書道美術館に所蔵されている松井如流宛の熊谷恒子の書簡を認する¹⁾。

熊谷恒子（一八九三―一九八六）は京都出身の昭和期を代表する女流仮名作家である。

恒子は明治二十六年に生まれた。生家の江馬家は京都の名家であり、美濃大垣藩主侍医の江馬家の分家にあたる。恒子の祖父である江馬天江は医者としてのみならず、漢詩人や書家としても著名な人物であり、私塾立命館の初代塾長を務めたことでも知られる。天江は京都において神山鳳陽や谷如意、頼支峯、富岡鉄斎、山中信天翁ら多くの文人と交わり、彼らとの合作も多く遺る。恒子の父である章太郎もまた医者の際らに書や漢詩を能くし、母の信子も和歌や書を好む人物であった。こうした家系に生まれた恒子が書に親しむことになったのは必然であるともいえよう。

大正三年、恒子は熊谷幸四郎と結婚する。熊谷幸四郎は香や筆墨を扱う鳩居堂を営む熊谷家の人物である。鳩居堂は頼山陽や貫名菘翁らと交流があったことでも知られ、また京都博覧会創設にも関わっているように、全国的にも書道用品の老舗として著名であった。恒子が結婚した年、鳩居堂は東京支店を構えることとなり、幸四郎がその支配人に任命され、二人は東京へ移り住むこととなる。以降、恒子の活動拠点は東京へと移行する。

恒子が書家を志すようになった背景には子どもとの存在がある。長男である欽吾の書の稽古に付き添ったことを契機として恒子は書家となった。当初は欽吾の師であ

った川北桜嶼に師事したものの、仮名を学びたいと思ひ立ち、尾上柴舟の門を敲く。その後、仮名の原型である漢字を学びたいという考えから、岡山高蔭に師事する。書家としての恒子の名を一躍有名にしたのは、昭和八年の泰東書道院展での受賞である。このとき恒子は仮名の最高峰である東京日日・大阪毎日新聞社賞（東日大毎賞）を受賞している。これによって、書家として名を馳せることとなった恒子だが、昭和十三年、緑内障で右目を失明する。様々な面で不自由を強いられることとなったが、幸四郎の支えによってこれを乗り越える。

昭和十年代後半、戦争が激しくなると、恒子は娘とともに北軽井沢の別荘へと疎開する。戦後は馬込の自宅が被災しなかったこともあり、そこを拠点として日本書道美術院をはじめ、戦後書壇の枠組みの中に他の書家たちと同様に参画していく。主に毎日書道展、現代書道二十人展、日書展などに出品し、作家活動を展開している。また恒子は昭和三十一年に大東文化大学の講師に就任し、その後四十二年に教授に昇っている。加えて、昭和四十年に当時の皇太子妃美智子殿下への書道進講の役目を命じられ、四十二年に勲五等宝冠章を受章、五十五年に勲四等宝冠章を受章しているように、昭和六十一年に逝去するまで昭和期を代表する女流仮名作家として華々しく活躍した。

成田山書道美術館には松井家から寄贈された如流宛の書簡が多数所蔵されているが、本稿ではこれらの書簡中、熊谷恒子の書簡を紹介する。如流宛の恒子書簡は成田山書道美術館に計十通所蔵されているが、そのうち四通が葉書で、六通が封書である。この十通の概要については表Ⅰを参照されたい。本稿ではこれらの書簡の

図版及び概要を紹介することによって、如流と恒子の親交の一端を確認したい。

【表Ⅰ】

| 松井如流宛熊谷恒子書簡一覧 | | |
|---------------|-------------------|----|
| 番号 | 消印 | 種類 |
| 1 | 昭和 18 年 6 月 7 日 | 葉書 |
| 2 | 昭和 18 年 12 月 19 日 | 封書 |
| 3 | 不明 | 封書 |
| 4 | 不明 | 封書 |
| 5 | 昭和 22 年 1 月 28 日 | 葉書 |
| 6 | 昭和 23 年 3 月 20 日 | 葉書 |
| 7 | 昭和 23 年 9 月 1 日 | 葉書 |
| 8 | 不明 | 封書 |
| 9 | 不明 | 封書 |
| 10 | 昭和 44 年 2 月 21 日 | 封書 |

松井如流宛熊谷恒子書簡

本章では、表Ⅰの資料番号1から8について紹介する。以下、凡例を示す。

【凡例】

- ・ 翻刻の改行は原則として原文に従っている。
- ・ 翻刻の漢字の表記は原文に従っている。
- ・ 翻刻の句読点は原文に従っている。
- ・ 追加や文字の転倒などは記号に従って本来の位置に配している。
- ・ 各資料は次に掲げる項目をこの順に示している。

葉書

〔資料番号〕 表Ⅰの通し番号

〔裏面図版〕

〔表面図版〕 書信が表面にある場合にのみ図版を掲載した

〔消印〕

〔種類〕 墨書かペン書かを示した

〔裏面翻刻〕

〔表面翻刻〕

〔補考〕 内容についての補考等

封書

〔資料番号〕 表Ⅰの通し番号

〔図版〕

〔消印〕

〔種類〕 墨書かペン書かを示した

〔翻刻〕

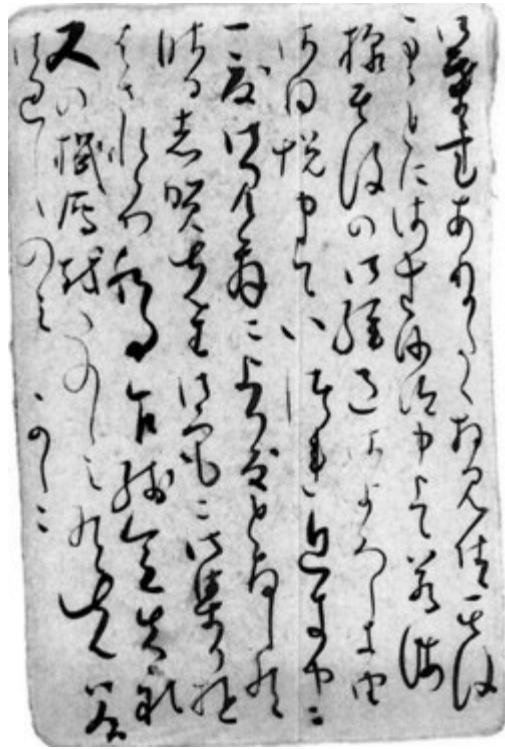
〔封筒表面翻刻〕

〔封筒裏面翻刻〕

〔補考〕 内容についての補考等

〔資料番号〕 1

〔裏面図版〕



〔消印〕 昭和十八年六月七日

〔種類〕 墨書

〔裏面翻刻〕

御葉書ありかたく拝見仕候其後

まことに御無沙汰申上候若海

様其後の御経過御よろしき由

御同悦申上候いつれ近き中に

一度御見舞に上り度と存し居候

昨日志賀先生御宅に御集り遊

はされ候や私事乍残念失礼

又の機会をたのしみ居候先は右

御返しのみ かしこ

〔表面翻刻〕

豊島区駒込一ノ一五九

松井如流先生

御もとに

六月七日

大森馬込西一ノ一五二三

熊谷恒

〔補考〕

ここに登場する「若海様」とは若海方舟のことであろう。若海方舟は戦前、三楽書道会を主宰したことで知られる。書面中に「其後の御経過御よろしき由」とあることから、この頃体調を崩していたのであろうことが想像される。方舟が昭和二十年五月十八日に如流に宛てた書簡の中で「肝臓の痛み」があることについて言及しているが、あるいはこの頃からこうした不調に見舞われていたのかも知れない。

恒子は昭和八年に泰東書道院に出品した「土佐日記」で東日大毎賞を受賞しているように、戦前から書道展に出品し、活躍している。如流は、戦前は東方書道院に所属しており、方舟とは異なる書道団体に身を置いていたが、両者の間にはその枠組みを越えた交流があったことがここからわかる。

[図版]

二カ目おちめやすまこと
 紺菊にちかぬはもももも
 竹まきの他思ひいふては
 一寸もふたはなれぬが
 了りし程のしるすま
 了りし程のしるすま
 了りし程のしるすま

七つ若海松のしるすま
 いろはのしるすま
 いろはのしるすま
 いろはのしるすま
 いろはのしるすま
 いろはのしるすま
 いろはのしるすま

二カ目おちめやすまこと
 紺菊にちかぬはもももも
 竹まきの他思ひいふては
 一寸もふたはなれぬが
 了りし程のしるすま
 了りし程のしるすま
 了りし程のしるすま

七つ若海松のしるすま
 いろはのしるすま
 いろはのしるすま
 いろはのしるすま
 いろはのしるすま
 いろはのしるすま
 いろはのしるすま

[消印] 昭和十八年十二月十九日

[種類] 墨書

〔翻刻〕

日々おしつまり心忙かしく存し上候

過日は御葉書ありかたく存し上候

承れば御病気の由其後如何

いらせられ候哉心にかゝりつゝも

御たつねも申上げす失礼申上候

御寒のをりから御大切にいのり上候

さて若海様の事につきて

いろゝゝ御手数様ありかたく

存し上候御仰せの通り金参拾

円内山様へ早速おくり置候

まゝ佐様御承知遊はされ度

何かと御手数様にて恐入候

二カ月前より女中無く候まことに

雑用に一日をおくり困入候

竹雲会の作品も此分では

一寸気分おちつかすおぼ

つかなき様に存し居候来春

早々にも女中一人ぜひ

目つけたくと存し居候御心あたりも

御座候は、又御世話願上度

御願申上候御寒さきひしき

折から御身御大切にいのり上候

乍末御奥様にもよろしく

御つたへ遊ばされ度先は右走筆

なから御返事

のみ

申上候

かしこ

松井先生 恒

侍史

〔封筒表面翻刻〕

豊島区駒込一ノ一五九

松井如流先生

侍史

〔封筒裏面翻刻〕

十二月十九日

大森馬込西一ノ一五二三

熊谷恒子

〔補考〕

昭和十九年一月頃、松井如流は『書之友』誌上において「十一月末から二週間ばかり風邪の床にいた私は近頃が無い久しい病氣をしたものである」と記しているが、この様子が熊谷恒子にも伝わっていたものと推察される。「承れば御病気の由其後如何いらせられ候哉」と体調を気にかけている。

「内山様」とは内山雨海のことであろうか。文中、恒子は二カ月前から女中が居らず、苦勞していることを述べているが、おそらく戦争の影響もあつたのであろう。如流に対して心当たりがあれば紹介してほしいと頼んでいることから、如流と恒子が親しい間柄にあつたことが想像される。

竹雲会については現在特定することはできないが、比田井小琴が昭和十九年十月

二日に如流に宛てた書簡の中で「この度は鳩居堂にて竹雲会展御催し遊ばし候とて御まねきいただきありがたく御礼申上候」と述べていることから、手習いのほか、展覧会を開催する団体であったことがわかる。恒子は京都で鳩居堂主人と結婚し、鳩居堂の東京支店を構えるために上京しているが、竹雲会が鳩居堂において展覧会を開催しているのもまた恒子の意志によるところであったと考えられる。

〔資料番号〕 3

〔図版〕



〔消印〕 不明



〔種類〕 墨書

〔翻刻〕

竹雲会の方々もいづれも御戦災にあはれ申候事

まことにさひしきことに候田邊様もとうく焼かれ申候様

申し居候

其後御起居如かに御座候や先日は御手紙有かたく

存し上候いよ／＼二十数年ぶりにて御帰郷

功なり名とげでの御帰郷に御座候へ共

御戦災にてまことに何かと御不如意の御事

万々御察し申居候お寺にてももの静かに日々を御過し

遊し其地にも只今はほとゝきすカツコが

なき居候由御歌に詩に又書に読書に日々を

御過し遊して暫くは御心身を御やすめ

遊ばされたく他の人々と異りて盤なる

御天性此際御幸福の事と御察し申居候

新紙にて拜見御地にも時々 B 29 通過の

由もとより御住居の方は平静と存し候へ共

御たつね申上候たゝ今はいつこの土地といへ共

安心なるところは無之野中山中の一

軒屋にても油断出来さる今日にて候まゝ

御用心遊はされ度候法帖其他の御大事な

おしなすでに御疎開にて御無事なりし

事此上なき御幸福に御座候私のもこの地に

参りて空襲の心配はまぬかれ申候へ共

食料事情おもしろからすなれぬ腰つきにて

畑をいたし居候ことしは気候不順にて

高原とは申せまことに朝夕冷々しく火鉢

恋しき心地いたし候此冬の事只今より

案じ居候何卒御身お大事にお元気に

御過し遊はされ度乍末御奥様にもよろしく

御傳へ遊はされ度先は右御見舞まで申上候

かしこ

松井如流先生

恒子

侍史

〔封筒表面翻刻〕

秋田縣平鹿郡横手町

羽黒上丁

桃雲寺方

松井如流先生

〔封筒裏面翻刻〕

七月二十一日

群馬県北軽井沢

大学邨

熊谷恒子

〔備考〕

消印は見えないが、その内容から戦時中の書簡と推定される。恒子は戦渦の激しくなってきた昭和二十年に北軽井沢へ疎開し、そこで終戦を迎えているが、この書簡の差出人住所が北軽井沢となつていことから、昭和二十年のものと特定される。

如流も恒子と同様に関東を離れ、地元の秋田の桃雲寺へ疎開し、そこで互いの近況を報告している。この時期、昭和十八年に組織された大日本書道報国会の活動も下火になり、多くの書家が地方へ疎開していた。恒子や如流も例外ではなく、戦渦を免れんと疎開し、そこで各々活動していたようである。如流は書学者としても名高く、また、戦後に刊行された『書跡名品叢刊』には如流の所有する拓本が多く掲載されているように、拓本の蒐集家としても著名である。書簡中に「法帖其他の御大事なおしなすでに御疎開にて御無事なりし事此上なき御幸福に御座候」と恒子が述べていることから、如流は学書のための法帖類も携えて疎開していたことがわかる。このように、戦前から如流は真摯な姿勢で書の研究に取り組んでいたのである。

〔翻刻〕

久々御手紙ありかたく存し上候

お元気にて何よりと御よろこひ申上候

いよゝゝ御上京にて御勤務

先も定まり御めてたく存し上候

御ちの閑静なる御生活に

御心身も御静養になりしことゝ

御察し申居候書道界もそろゝゝ

動き出し候様子にてまづ

結構なることゝ存し候

竹雲会の皆々様の御消息

存し不申候へ共御元氣のことゝ

存し居候鈴木先生三月頃の

おたよりにては勤務先御多忙

にていつこにも御無沙汰に

なりがちとの御事にて御元氣

らしく御見うけ申候埼玉縣

に御寄寓にては東京の方に

御出向きは何かと御不自由の御事と

存し上候へ共御寸暇も御座候はゝ

一度大森へも御こし遊はさ

れたく御付入候御かけ様にて

宅は焼け残り候事はまことに

幸福なりしことゝよろこひ居候

鈴木先生も上池上にてあまり

遠からず候まゝもし御出むき

の節はお打合せいたして

鈴木先生にも御こし願

はるれば都合よろしくと考へ居候

二三日前店へ御立より下され候由

主人申し居候其せつまことに

御元氣なりし事と承り

よろこひ居候ひし事に御座候

とにかく先生の御上京は

竹雲会のためにも大きな

よろこひと存し上候

先は右御返事まで申上候

万々は御めもしの上にて

かしこ

恒子

松井先生

御もとに

〔封筒表面翻刻〕

埼玉県所澤町上安松

一三〇四

鈴木様方

松井如流先生

〔封筒裏面翻刻〕

四月十五日

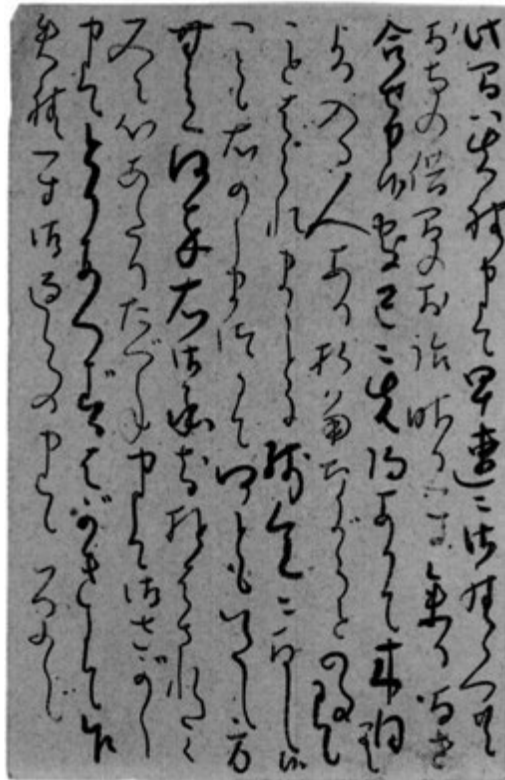
東京都大森馬込

〔備考〕

消印は見えず、書簡が送られた時期は不明である。しかし、文中に「書道界もそろそろ動き出し候様子」や「御かけ様にて宅は焼け残り候事はまことに幸福なりしことよるこひ居候」、「先生の御上京は竹雲会のためにも大きなよろこびと存し上候」とあることから、昭和二十一年の書簡であると推察される。戦後の書道界の再建は、日本書道美術院が昭和二十年十二月八日の『朝日新聞』に全国の「書道家へ」という広告を載せたことに始まっている。第一回日本書道美術院展は昭和二十一年七月二十七日から八月八日の期間に東京都美術館において催され、ここに如流と恒子は審査員として参加している。「書道界もそろそろ動き出し候様子」とはこうした動きを指しているのだろうか。

文中に登場する「鈴木先生」とは、如流が身を寄せた鈴木柳川のことであろう。ここから、柳川と恒子の間にも書簡のやりとりといった交流があったことがわかる。如流は昭和二十一年から昭和二十五年まで、柳川の宅に仮住まいした。恒子は如流の上京を喜び、「埼玉縣に御寄寓にては東京の方に御出向きは何かと御不自由の御事と存上候へ共御寸暇も御座候は、一度大森へも御こし遊はされたく御付入候」と如流の訪問を願っている。

〔裏面図版〕



〔消印〕 昭和二十二年一月二十八日

〔種類〕 墨書

〔裏面翻刻〕

此間は失禮申上候早速に御座候へ共
お寺の借間のお話昨日一寸参り聞き
合せ申候處已に先約ありて来月早々
より入る人あり折角ながらとの事にて
ことはられまことに残念に存し候
へとも右のしまつにて何ともいたし方
無く何卒右御承知遊はされたく

又々心あたりたづね申して御さがし

申上候とりあへずはがきにて乍

失禮一寸御返事申上候 草々

〔表面翻刻〕

埼玉県所澤町上安松

一三〇四

鈴木様方

松井如流先生

東京大森馬込西一ノ一五二三

一月二十八日 熊谷恒子

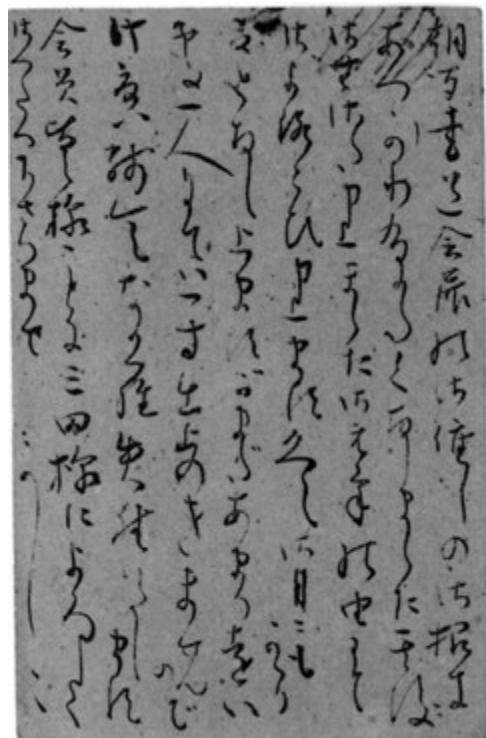
〔補考〕

如流が恒子に寺の借間の心当たりがないか尋ねていたのであろう。恒子は文中で希望していた寺には先約があり、予約が取れなかったことを謝罪している。何のために借用しようとしていたのかは不明である。

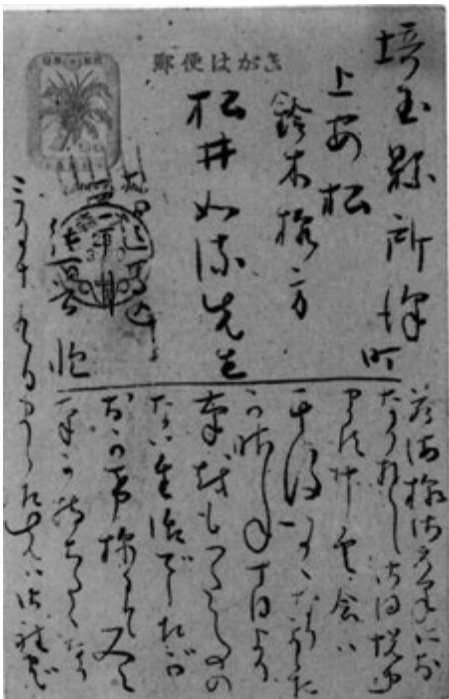
〔資料番号〕

6

〔裏面図版〕



〔表面図版〕



〔消印〕

昭和二十三年三月二十日

〔種類〕 墨書

〔裏面翻刻〕

朝聞書会展の御催しの御招き

あつかり有かたく存しました其後

御無沙た申上ました御元気の由にて

御よろこひ申上ます久々御目にもかゝり

度と存し上ますがまだあまり遠い

處一人にては一寸出歩きませんので

此度は残念ながら失禮いたします

会員皆様ことに三田様よろしく

御つたへ下さいませ かしこ

〔表面翻刻〕

埼玉縣所澤町

上安松

鈴木様方

松井如流先生

若海様御元氣にお

なり遊し御同悦申上

ます竹雲会は

其後いかゝりました

か昨年十月より

筆をもつた事の

ない生活でしたが

おかけ様にて又々

筆か持ちたくなり

ました先は御禮まで

三月十九日

熊谷恒

西一丁目

大田区馬込

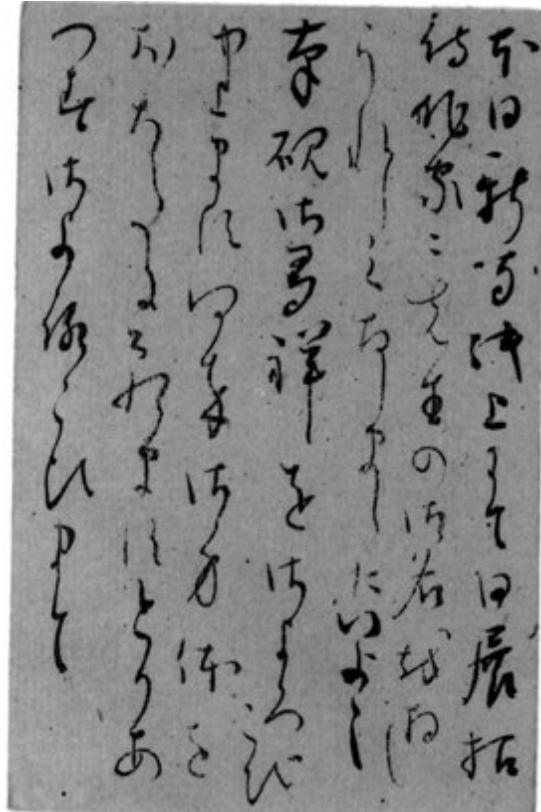
〔補考〕

ここに登場する「朝聞書会展」とは如流が主宰する書道団体である朝聞書会主催の展覧会である。朝聞書会展は昭和十八年から開始され、この年は第五回目を記録する。昭和十八年に銀座画廊で開催された第一回朝聞書会展には賛助出品として恒子の名前が確認できる。第五回朝聞書会展は如流が所沢に住んでいたこともあり、所沢織物組合事務所にて開催された。恒子は「あまり遠い處一人にては一寸出歩きません」として展覧会に赴けない旨を謝しているが、このためであろう。書簡後半に記載されている「三田様」とはおそらく如流の門弟である三田清白を指すと考えられる。

表面では、「若海様」について言及している。前述の通り若海方舟は昭和二十年に如流に対して自身の不調を述べていたが、あるいはそれが続いていたのであろうか。また資料番号2く4にも登場する竹雲会の動向について尋ねているが、その詳細は不明である。

〔資料番号〕 7

〔裏面図版〕



〔消印〕 昭和二十三年九月一日

〔種類〕 墨書

〔裏面翻刻〕

本日新聞紙上にて日展招

待作家に先生の御名を押し

うれしく存したいと思いますよ、

筆硯御多祥を御よろこび

申上ます何卒御身体を

お大事に願ますとりあ
へず御よろこひまで

〔表面翻刻〕

埼玉県所澤町上安松

一三〇四

鈴木様方

松井如流先生

東京大田区馬込西一丁目一五二三

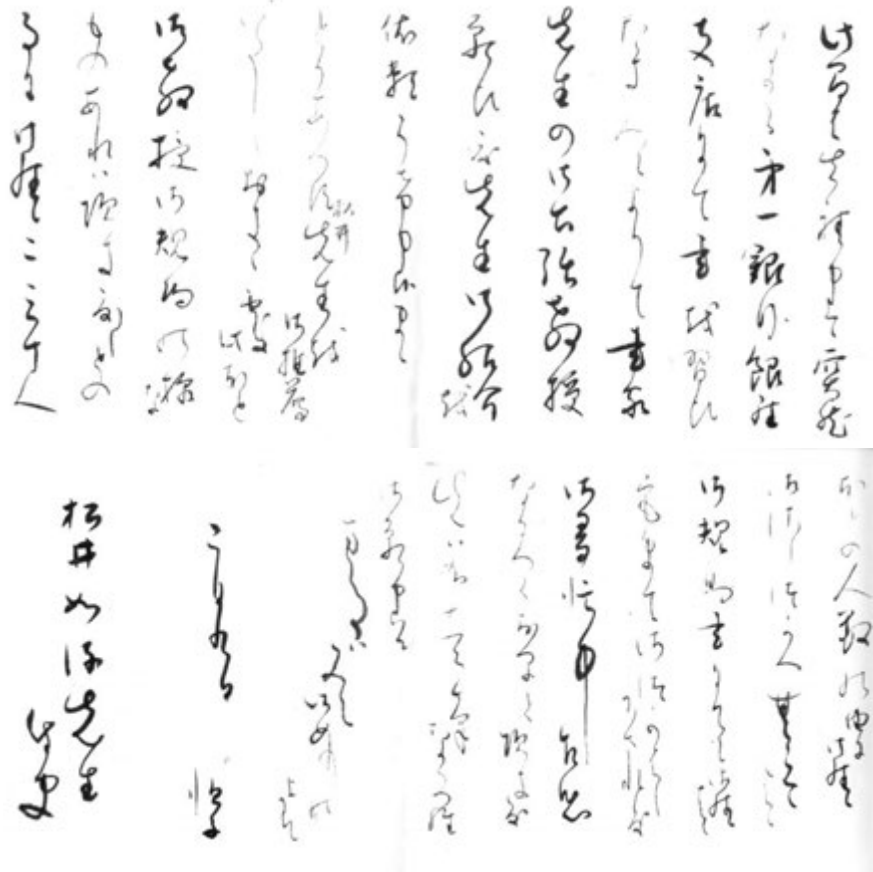
熊谷恒子

〔補考〕

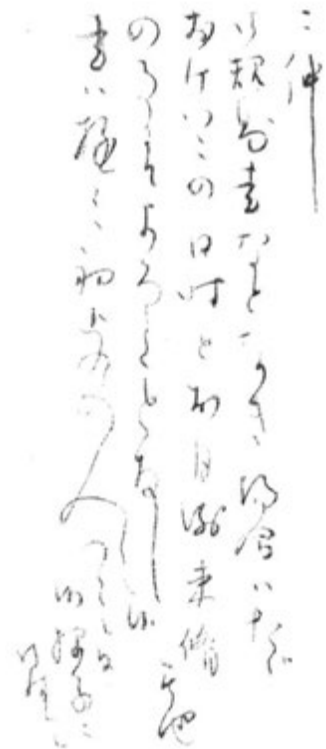
書が日展に加入したのは昭和二十三年の第四回日展からである。この年の日展に如流は招待作家として参加し、「白居易 題遺愛寺前溪松」を出品している。

文中に「本日新聞紙上にて日展招待作家に先生の御名を押し」たとあるが、これは『毎日新聞』東京朝刊である。昭和二十三年九月一日の同新聞には「日展、百五十名が紹介されている。おそらく恒子はこの記事を目にしたのであろう。早速、如流に葉書を送り、「いよ、筆硯御多祥を御よろこび申上ます」と祝いの言葉を述べている。

〔図版〕



〔別紙図版〕



〔消印〕 不明

〔種類〕 墨書

〔翻刻〕

此間は失禮申上候突然
 なから第一銀行銀座
 支店にて書を習ひ
 たき人々よりて書家
 先生の御出張教授
 願ひ度先生御紹介を
 依頼うけ申候まゝ
 とりあへず松井先生を御推薦
 いたしおき候處此ほど
 御教授御規約の様な
 ものあれは頂き度しとの
 事に御座候二三十人

ほとの人数の由に御座候
御さしつかへ無之候は、

御規則書にても御座候は、
宅まで御つかはし下され度

御多忙中乍恐

なるへくお早く頂き度

先は右走筆ながら

御願申上候

万事は

又々

御めもしの

上にて

二月九日

恒子

松井如流先生

侍史

〔別紙翻刻〕

二伸

御規則書となき場合はたゞ

おけいこの日時とお月謝束脩其他

の事にてよろしくと存し候

書は極く初歩の人々のことに

候様子に御座候

〔封筒表面翻刻〕

埼玉県所澤町上安松一三〇四

鈴木様方

松井如流先生

侍史

〔封筒裏面翻刻〕

二月九日

東京都大森馬込

西一丁目一五一三

熊谷恒子

〔備考〕

本書簡の消印は見えず、時期は不明であるが、宛先の如流の住所が「所澤町上安松」となっていることから昭和二十一年から昭和二十五年の間に送られたものであることがわかる。本書簡は恒子が如流に対して第一銀行（帝国銀行）銀座支店の出張教授を頼んでいる内容である。資料番号9では、これについての詳細が語られている点から本書簡はその前に位置付けられると考えられる。そのため、本書簡は昭和二十五年のものと推定される。

第一銀行は如流が昭和四年から昭和二十年まで務めた銀行である。そうした縁もあって如流に依頼したのであるうか。しかし、この件について、恒子は資料番号9の書簡において取り下げている。

ありかたく拝見させて
頂きあつく御禮申上候
此たひはかな消息にて
ことにおもしろく拝見いたし居候
御編輯には御骨折の
ことゝ存し候へともこれだけ
御立派な書誌出来上り
まことに御努力も
かひあることゝ御同悦申上候
あまりお丈夫にてもなき
御身体御無理なき様
このみちのために
御つくし下されたく願上候
先日一寸お願ひ申上候
第一銀行書のおけいこ
の事昨日係りの人店に
参り書のおけいこする
人々はまことに初歩の
人々のみにて松井先生では
只今の處少々勿体ない
もつと二流三流の先生を
たのみますとて帰り候由
先生本店に御こし遊
はすことは承知いたし居候
由に御座候佐様の
ことゝ何卒あしからず

御承知願上候

お忙かしいをりから

あまり初歩の人々のみの

おけいこはまことに少々

勿体ないことゝ存し上候

若い人てあまり名のない

人で結構との事にて候

よい時候と相成候

何卒御身体お大事に願上候

先は御禮かた／＼右まで

申上候

かしこ

三月六日

恒子

松井如流先生

御もとに

〔封筒表面翻刻〕

埼玉県所澤町上安松

一三〇四

鈴木様方

松井如流先生

御もとに

〔封筒裏面翻刻〕

三月七日

〔備考〕

本書簡には消印が見えず、書かれた時期は不明である。しかし、宛先の住所が「所澤町上安松」となっている点、内容が『書品』に関わるものである点から昭和二十五年の書簡と推定される。文中に「書品御見事なる三月号」とあるが、『書品』三号において「傳藤原行成仮名消息」の特集が組まれている。これは、恒子の「此たひはかな消息にてことにおもしろく拝見いたし居候」という発言とも重なる。

文中に「第一銀行書のおけいこ」に関わる内容が書かれているが、これは資料番号8で触れられていた、第一銀行銀座支店の出張教授依頼の件であろう。前回の書簡では如流に出張教授を依頼していたが、係の人が鳩居堂を訪れ、「松井先生では只今の處少々勿体ない」と発言したことに触れ、「お忙かしいをりからあまり初歩の人々のみのおけいこはまことに少々勿体ないこと、存上候若い人であまり名のないう人で結構との事にて候」として依頼を取り下げている。当時如流は日展の招待作家に名を連ねているように、書道界を牽引する書家の一人であった。また、昭和二十四年十二月に創刊された『書品』で編集を務めており、多忙な身の上であったことが想像される。そうした如流の立場を鑑み、恒子はこうした発言に至ったのであろう。

〔図版〕



〔消印〕 昭和四十四年二月二十一日

〔種類〕 墨書

〔翻刻〕

突然お電話にて

まことに失礼申しました

住田様は私も

はしめて拝顔いたし

ましたせひ先生に
お願いいたしてくれとの
ことにて御多忙の
中まことに御迷惑様とは
存しなから
御ひきうけ申しました
よろしくお願い申します
いつれ又御めもしの上

万々
申し上げます
右御願まで

松井如流先生
恒

御もとに

〔封筒表面翻刻〕
練馬区関町五ノ二三一
松井如流先生

〔封筒裏面翻刻〕

大田区馬込西一ノ一五二三

熊谷 恒子
二月二十日

〔備考〕

恒子は昭和三十一年に大東文化大学の講師となり、四十二年に大東文化大学の教

授となっている。一方、如流は昭和二十九年に大東文化大学教員に就任、三十一年には教授となっている。この書簡が交わされた頃、如流と恒子は同僚という間柄でもあった。

文中に登場する「住田様」の詳細は不明であるが、恒子は「住田様」に頼まれ、如流に頼みごとをしたようである。はじめは電話で依頼したようであるが、書簡で再度「よろしくお願い申します」と頼み込んでいる。

おわりに

ここまで見てきたように、如流と恒子の書簡でのやり取りは、戦時中に始まり、戦後は昭和四十年代のものまで遺っている。その内容は、資料番号3のような互いの安否を報告し合うものや資料番号8のように恒子が如流に仕事を依頼しているものまで多岐に渡っている。これらの書簡からは両者の親密な関係が窺えよう。

これらの書簡を概観すると、そこには若海方舟や竹雲会の名称が頻繁に登場する。如流と恒子、そして方舟という戦前の所属団体が異なる三人の間にもどのような交流があったのかは定かでない。成田山書道美術館には如流宛の方舟書簡が三通所蔵されているが、これらの中に恒子について言及しているものはない。三通の書簡の内容は、如流に対して訪問を求めているものが二通あり、昭和二十年頃にはすでに如流と方舟の間には互いの家を行き来するほどの親交を結んでいた様子が窺える。一方、恒子は鳩居堂を営んでいたため、作家としての交流のほか、鳩居堂を介した交流もあったのであろうか。如流と方舟の交流の背景には恒子の存在もあったのかも知れない。

竹雲会については、その詳細が明らかになっていない。しかし、名称に如流の師である吉田苞竹の「竹」が使用されていることから、その関係が推察される。竹雲会は鳩居堂で展覧会を開催するなどの活動を行っていた書道団体である。比田井小琴が昭和十九年に如流に対して竹雲会の展覧会に赴けないことを謝罪している点、恒子が竹雲会のための作品制作を行っている点から、竹雲会の展覧

会には如流と恒子の両者が出品していたと考えるのが妥当であろう。このように、戦時中にはすでに両者の親交こうした書道団体の活動を通して育まれていたのである。

昭和二十七年、恒子は『書品』誌上で書簡についての文章を綴っているが、その際に次のように述べている¹⁾。

彫刻の大家、佐藤清藏氏、油繪の里見勝藏氏、其他豊道春海、川村驥山、片山万年、松井如流、金子鷗亭の諸先生の見事な手紙も大切にしている。

如流が恒子の書簡を保管していたことと同様に、恒子もまた如流の書簡を大切に扱っていたことがわかる。

今回紹介した書簡は二人の交流のごく一部でしかない。しかし、これらの書簡からは、戦前からすでに書家としての交流を持ち、戦時中には互いの近況を報告し合い、励まし合っている姿がみえる。また、戦後の書壇の中心を担っていく役目を担った二人の間には、同じ毎日書道展という舞台で活躍する作家としての交流もあった。七歳差で、性別も異なり、また漢字作家と仮名作家という違いもあった二人だが、晩年に至るまで、親交を深めていた様子がこれらの資料から窺い知れるのである。

注

1

松井如流の概要については拙稿「成田山書道美術館蔵松井如流宛西川寧葉書からみる『書品』編集の断面」『書道学論集』十六号（大東文化大学大学院書道学専攻院生会、平成三十一年）を参照されたい。

2

これらの書簡の概要については前掲注1「成田山書道美術館蔵松井如流宛西川寧葉書からみる『書品』編集の断面」を参照されたい。

3

「書道家へ」『東京朝日新聞』（昭和二十年十二月八日朝刊）四面参照。

4

熊谷恒子「せうそこ」『書品』三十一号（昭和二十七年）五頁参照。